《十字を負いし山より》

――クラシンスキの詩から読み解くショパンの歌――

松尾 梨沙

本稿はショパン最晩年の歌曲作品《十字を負いし山より *Z gór, gdzie dźwigali* 》（1847）について、詩と音楽の両面から分析を行うものである。それにより、これまで明確にされてこなかった、ショパンとポーランド詩学との関わりについて指摘すること、またその関わりが、彼の作曲技法にまで影響を及ぼした可能性について考察することを目的とする。

現在判明している限り、ショパンが生涯にわたり書き続けた歌曲は、全てがポーランド語の詩によるものであった。ナショナル・エディションからは現在 18 曲（補遺を除く）の歌曲が出版されているが、それらの詩の作者は 6 名のポーランド詩人であり、中でも最後に書かれた《十字を負いし山より》は、クラシンスキ Zygumnt Krasiński（1812～1859）の詩に作曲されている。クラシンスキは、同時代に活躍したミツキェヴィチ Adam Mickiewicz（1798～1855）、スウォヴァツキ Juliusz Słowacki（1809～1849）とともに、長い間ポーランド・ロマン主義三大詩人の一人として称されてきた。ショパンの歌曲で採用された詩の作者の中では、ミツキェヴィチに次いでその名がよく知られた人物と言えるだろう。

本稿前半では、このクラシンスキという人物と作風について概観し、またショパンとの関係を、一人の女性をキーパーソンとして考察する。後半では、詩学分析と楽曲分析を行う。「十字を負いし山より」の成立背景や特徴、またこの詩を巻頭に付した叙事詩『最後の人』については前半でも説明するが、それらをふまえた上で、詩学分析では、意味内容、韻律形式、また人称や時制の観点から考察する。楽曲分析では、こうした詩学分析結果に関連づけながら、形式、韻律、和声法について論じる。さらにこのようなショパンの技法は、他のよく知られている彼の作品にも通じることを踏まえ、最終的には、ポーランド詩学が総じて彼の作曲プロセスに関わる可能性について考察する。